

読後、震えの来るような傑作である。

■HHH ブラハ、1942年

大反響！ 続々重版！

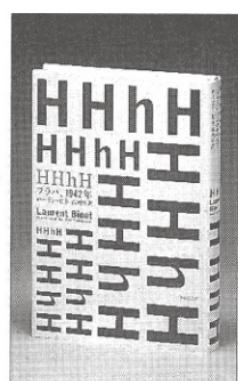
歴史小説と呼ばれるジャンルは、我が国の出版界においても、一 大マーケットを築いている。それ は事実と関係しているが、しかし ノンフィクションではない。歴史 小説の作者は、資料や記録を駆使 して、過去に実際に起つた出来 事を描き出す、あるいは物語る。そ もそもやはり物語なのだ。つまり歴史小説に描かれた「歴史」は、 当然のことながら、ほんとうの事 実とは違っているし、あちこちに 穴が開いている。明らかに出来な かった欠落を、作者は自らの想像 力や推論によって埋めてゆく。む しろそこにこそ歴史小説を書く、 そしてそれを読む醍醐味があるの だと言つてもいいかも知れない。

だが、この小説の語り手である 「僕」は、自分にそのような「作者 の横暴」を許すことが出来ない。彼 が書こうとしているのは、194

迷いや不安と共に 歴史を物語ること

2年のブラハで実際に起つた、ユダヤ人大量虐殺の発案者にして 責任者であり、「金髪の野獸」と呼ばれたナチスの高官ハイドリヒの 暗殺事件である。実行犯はチェコ人のヤン・クビシュとスロバキア人のヨゼフ・ガブチーク。2人の青年は当時ロンドンにあったチャコスロバキアの亡命政府によってブ ラハに送り込まれる。フランス人でありながら、この事件を小説にしようと思いついた「僕」は、可能な限りの調査を尽して、この歴

史上の事件を再現しようとする。



高橋啓訳、東京創元社・2730円／
Laurent Binet 1972年、パリ生まれ。初の小説作品の本書で、2010年度
ゴンクール賞最優秀新人賞、リーブル
・ド・ボッシュ読者大賞。

ローラン・ビネ（著）

「歴史を物語ること」自体を主題 にしている点にある。「見て来た ところでは、脇道に逸れながらも、な んとか書き続けようとする……」 この小説の独創性は、何よりも 「僕」にはどうしても書き出さない ことが出来ない。なぜならそれは結 局のところ嘘だからだ。すこぶる 感動的のは、にもかかわらず彼 が書いてゆくこと、迷いや不安や 布れを隠すことなく、むしろそれ と一緒に過去に向かってひびと するところである。そしてこの小説 は、最後について「その日」の一 部始終を物語る。それがいかなる ものになつてゐるかは、ここで述 べるわけにはいかない。だが間違 いなく言えることは、それが限り なく誠実で、真摯で、繊細で、勇 敢な行為であるといつていいだ。読 後、震えの来るような傑作である。

佐々木敦

朝日新聞朝刊
(2013年9月8日掲載)

評 佐々木 敦

批評家早稲田大学教授

東京創元社